2011 年　6 月 19 日・東京新聞「読書」欄では

森崎和江（作家・詩人）

若松丈太郎著『福島原発難民　南相馬市・一詩人の警告』（コールサック社）

同書は一九七一年から二〇一一年四月の「原発難民ノート―脱出まで」のエッセーを含む若松丈太郎の詩とエッセー集。九四年五月にウクライナを旅し、チェルノブイリを訪問。チェルノブイリから三十㌔圏の無人地帯の耕地は荒れるがまま。

若松は福島原発を中心にした半径三十㌔圏内の最悪の事態を自分のこととして許容できるかどうか、想像力を駆りたててみなければならない、と。祖父たちが何代にもわたって暮らしつづけ、自分もまた生まれてこのかたなじんできた風土、習俗、共同体、家、土地、その他あらゆるものを。

解説の鈴木比佐雄はカバー装丁の写真として、若松を南相馬で撮影したいと報道カメラマン福田文昭とともに福島へ…。鈴木の郷里福島県いわき市の浜辺の町は消えていた。南相馬市原ノ町駅近くの若松家に到着。本書は私に天災人災の現状を教示する貴重な体験書です。

と紹介されています。